

ほっと通信



例年に比べ長く暑い夏が過ぎ、木々が色づく季節となりました。教室内もずいぶん過ごしやすくなったのではないのでしょうか。

本号では学校行事への取り組みを通して特別支援教育について考えてみたいと思います。

特集：学校行事への取り組みを通して

秋は子どもたちが大きく成長する行事がいっぱいです。行事への取り組みの中で、様々な教育的ニーズを持つ子どもたちのいるクラスをひとつにまとめていく難しさを感じることも多いのではないのでしょうか。行事は集団でひとつのことに取り組むため、配慮を必要とする子どもたちに対しては、個別の指導支援だけでなく、集団の中でどう指導支援するか、という点も大切であると思います。日頃の取り組みの中で、配慮を必要とする子どもたちを集団の中でどう育てていくか、という点を大切にされているお二人の先生に、学校行事への取り組みについて伺いました。

★あらゆる活動を班で一緒に ～小集団で深める学び合いに～ 小学校 A 先生のお話

*班での活動を土台にした集団づくり

わたしのクラスでは、班活動を集団での活動の土台として考えています。そのため、班を給食当番や清掃分担、話し合いだけでなく、日直や体育のチーム編成などグループでの活動全般に使っています。行事への取り組みの中にも、この班活動を活かしています。班であらゆる活動に取り組むため、それぞれが違った活躍の場を見つけたり、苦手なことはフォローし合ったりする中で、お互いの理解が深まります。班の中にいる配慮の必要な子どもに対して、周りの子どもが理解を深めることで、その子に接しやすくなります。配慮の必要な子どもも、周りとうまく関わればよいのか少しずつ学び、集団に入りやすくなります。そして、小集団での相互理解が深まることで、学級集団としての結びつきにつながります。



*配慮の必要な子どもを集団の中で支えていくために

クラスの実態にもよりますが、3年生くらいから、班替えは2ヶ月に1度、班長を立候補で決め、班長と教師で相談して班のメンバーを決める形にしています。班のメンバーを決める時は、メンバーのバランスはどうか、このメンバーでうまくやれそうか、などを、班長の率直な意見を聞きながら一緒に考え、決めていきます。配慮の必要な子どもなどが最後に1人残ってしまったときは、どの班ならその子が参加しやすいか、その子を引き受けた班の班長を周りの班長がどうサポートするか、というところまで含めて話し合います。この相談の場が班長同士の結びつきを生み、それが学級集団(=班の集合体)としての連帯感を作っていくことにもつながっています。

話し合いによって班のメンバーを決めますが、配慮が必要な子どもを班長だけにまかせるわけで

はありません。配慮の必要な子どもが、周りからたくさん注意されることがないように、座席を配慮し、教師がまめに声をかけるようにしています。また、班の中でトラブルなどがあったときは、トラブルを起こした子どもだけの問題とせず、班の問題として扱い、班全員と教師で話し合う場を持つことを基本にしています。本人を含めて話をするので、話し合いは課題解決の場でもあり、お互いの理解を深める場にもなります。状況によっては、トラブルを起こした子どもと個別に話をし、同じトラブルがおきないように配慮することもあります。

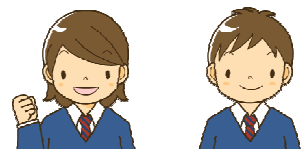
***行事への取り組みの中で**

行事への取り組みに班活動を活かす例としては、運動会のダンスがあります。初めは班ごとに練習を行い、個での足固めをしていきます。それから練習の集団を、徐々にクラス、学年、と大きくしていきます。毎日一緒に活動している小さな集団で練習を始めるので、大きな集団の中が苦手な子どもでも練習に参加しやすかったり、慣れているメンバーなので得意な子は苦手な子に教える、苦手な子は上手な子から教わって上達を目指す、といったやりとりがしやすかったりします。

秋頃にある学芸会は、それまで集団活動のベースにあった班を離れて活動する、一歩進んだ段階です。学芸会はピアノ、裁縫、工作、せりふを覚える、といったそれぞれが得意なところに磨きをかける場になります。子どもたちは班活動の中で、協力すること、友達と声をかけあうこと、自分の役割を果たすこと、そうするとうまくいく、といったことを学んでいます。そういった学びをもとに、個人プレーではなく、得意な子、やってみたい子が力を合わせて一つのことに向かいます。

***誰のどの役が欠けてもできないんだよ、と伝えながら**

子どもたちには、学校生活の中で、“みんなでやるって素敵だな”という集団の持つ良さを味わってほしいと思っています。そのため、日々の取り組みの中では小集団（班）での活動を大切にしています。そして、力を出し合ってみんなで一つのことを創造していく行事への取り組みの中では、子どもたちが“自分たちでやった”と思えるような指導を心がけ、「誰のどの役が欠けてもできないんだよ」と、くり返し言葉で伝えるようにしています。



★生徒と真剣に話し合う 中学校 B 先生のお話

***個と集団を結ぶために ～合唱コンクールへの取り組みの中で～**

クラスの中に周りと同じ参加の仕方が難しい生徒がいた場合、みんなが納得してすすめることが大切だと考え、本人、保護者、周りの生徒などと話し合いをするようにしています。

あるケースでは、合唱コンクールの練習にどのように参加するか、まず本人と話し合い、一緒に歌うという選択肢以外にも、楽譜作り、教室の装飾（後述の教室内の掲示）、練習用の CD の準備作成、CD デッキの操作、列がきれいに並べているかを見る、といった役割などから、現状で無理のない参加の仕方を探りました。また、それを周りに誰からどう伝えるかについても相談しました。

保護者には、本人と話したことや、周りの生徒は本人が困り感を持っていることに薄々気づいており、どうしてあげたらいいのかな・・・と気にかけているといったクラスの現状、本人の苦手なことや今がんばっていることを周りに理解してもらった方が本人にとってプラスになるのではないかと、といった担任としての思いなどを伝えました。保護者からは、クラス全体に話すのに抵抗があるけれど、理解者はほしい、実行委員やパートリーダーなど限られた数名に本人の苦手なことを話すのならかまわない、よろしく願います、という返事がありました。

そこで、数名の生徒たちに本人はどういうことが苦手で参加しにくいのか、今どんな思いでいるのか、などを伝え、その子の参加できることを見つけるため話し合いをしました。ここでどの

ように伝えるかが一番難しく、同時に一番大切なため、きちんと伝わったな、と思えるまで、場合によっては時間をかけて何度も話し合いをします。ここで一緒に真剣に考えることは、チームの中にその子の味方をつくることにもつながります。そして出た意見を本人へも伝え、改めて参加の仕方について考えていきました。結果的に練習に参加せず、本番だけステージに立つだけだったとしても、周囲の理解があるかないかで、その行動の受け止めは全く違ったものになると思います。

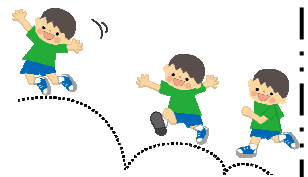
***目に見える形にして伝えること ～行事への取り組みの中で心がけていること～**

配慮が必要な生徒と学級集団をつなげる指導を行いながら、もう一つ心がけている指導があります。それは、“言葉にして伝えること”、そしてそれを“見える形”にすることです。みんなが今、目指していることや教師が子どもたちに伝えたいことを言葉にする、教室に歌詞を貼り出す、『金賞とるぞ』等の目標を掲示する、お互いの楽譜に寄せ書きをする、それを学級通信にのせる、といったことで“見える形”にします。見える形にすることで、雰囲気を感じ取るのが苦手なタイプの生徒にも、みんながどんなことをがんばりたいのか、どこに向かっているのか、といったことが伝わりやすくなります。また、寄せ書きにクラスメートが書いてくれた言葉が、まわりが自分をどう見てくれていたのか、ということに気付くきっかけになったりもします。

行事はクラスの団結を深める場、生徒同士の気づきの場だと考えています。行事が終わると、配慮が必要な生徒に対する理解が深まっているため、周りも接しやすくなるし、その子も参加しやすくなっている、参加できる部分が増えると感じています。

***日頃から心がけていること＝行事への取り組みで心がけていること**

“見える形”の指導は、配慮が必要な生徒との日頃の関わりの中で心がけていることのひとつです。思っていることがうまく伝えられずにいるなと感じたときは、「それはこういうこと?」「先生にはこう聞こえるよ」など、言葉にして確認するようにしています。相手の気持ちがわかりにくく、人を傷つける言葉を書いてしまう生徒への指導では、クラス全員にこれまで言われて嫌だった言葉を書き出してもらい、それを教室に掲示する、それを見てみんなで考える、といった取り組みをしたこともあります。このように、気持ちという形のないものを、ことばという形にする、ときには目に見える形にもすることで、自分の気持ちや行動に気づくことができたり、その子と思いを共有することができたりするのではないかと考えています。



★二人の先生からお話を伺って ～学校行事への取り組みを通して～

“みんなでがんばろう”という気持ちを育てる集団づくりは、集団生活である学校生活のベースにあると思います。しかし、学級という大きな集団に参加することを苦手とする子どももいます。そのような子どもも安心して集団で学べるよう、A先生は班長との話し合い、B先生は実行委員やパートリーダーとの話し合いを通して、その子に対する理解を深め、学級の中でその子を支える核になる子どもたちを育てていました。また、班などの小集団や学級の気持ちを“みんなでがんばろう”という方向に導く指導は、配慮の必要な子どもを、班長など核になる子どもが支えるという形から、小集団、学級全体で支える形に広げる指導支援にもなっていると思いました。さらに、いずれの先生も、配慮の必要な子どもに声かけなど個別の指導支援をすることで、周りの子どもたちがその子を受け入れやすくする配慮もされていました。

お話を伺って、配慮が必要な子どもたちは、個別の指導支援と集団の中での指導支援の両方を受けることで、集団での学び合いの中でより豊かな成長ができるのではないかと改めて感じました。そして、そのような学び合いによって、周囲の子どもたちも成長できることを感じました。

ぽけっと

「行事を成長の場にするために」



行事は教科学習より評価の観点を広くとることができるため、評価できる場面を設定しやすく、子どもの自尊感情を高めるチャンスになります。自己評価をすることはもちろん、目に見えないこと、長いスパンでの変化など、本人の気づきにくいところを周りから伝えてあげてほしいと思います。特に、本人が失敗した、と感じているときは、その気持ちを受け止めるだけでなく、よくできていた面も伝え、“できた”“よかった”という気持ちで行事をしめくくれるような配慮が大切です。

また、行事は学校と保護者で子どもの姿を共有するチャンスになります。表面的に見える成功・失敗にとらわれすぎず、保護者がどう受け止めたのか、子どもの気持ちの状態、どういう配慮が有効だったのか、といったことなどを、保護者と一緒にふり返ることで、子どもの理解を深めたり、その後の関わりに活かしていったりすることが大切ではないかと思います。行事をどの子にとっても成功体験の場、そして“成長の場”としたいですね。

文責：心理士 中村桂子

キーワード

「就学時健診」

就学時の健康診断（以下、就学時健診）は「小学校等への就学予定者を対象に行われており、その実施が市町村教育委員会に義務付けられている。市町村の教育委員会が就学予定者の心身の状況を把握し、小学校等へのはじめての就学に当たって、治療の勧告、保健上必要な助言を行うとともに、適正な就学を図ることを目的としている」とされています（文部科学省HPより）。

近年、特別支援学級や特別支援学校を選択する児童が増えている一方、保育園や幼稚園などからの申し送りや就学支援シートの提出などがなく、通常の学級に就学してから課題に気づき対応に苦慮するケースも少なくありません。

学校の先生方にとって就学時健診は入学前に保護者と知り合うチャンスでもあり、こんな感じの子どもが入っていくという準備・心構えになる機会でもあると思います。しかし、保護者にとっては就学時健診を受けたり就学前に子どもの気になる様子について伝えたりすることで、ふるいにかけてられるのではないかと、希望する学校・学級に入れないのではないかと不安や抵抗感から心を開いて相談することが出来ないこともあると思います。

就学前に保護者と面談する機会をもち子どもの情報を共有したり、就学支援シートの活用をはじめ保育園や幼稚園と連絡を取り合ったりすることが、子どもにとっても学校にとってもプラスとなることを伝えながら保護者の心をほぐしていくきっかけとしても、就学時健診は大切な役割をもっていると思います。

子どものより豊かな成長のために、子どもと保護者が信頼と安心感を持って入学する日を迎え希望ある小学校生活のスタートを切れるよう、準備したいですね。

文責：心理士 渡瀬 恵



巡回相談のご案内

特別支援教育担当の心理士・研究主事などが、授業観察および聞き取り、ときには発達検査などを通して、発達の特性を見立て、先生方と一緒に校内での支援について考えていきます。

まずは電話でご相談ください。相談の進め方をご案内いたします。

電話予約→情報共有→日程調整→巡回訪問→（状況により継続相談）

特別支援教育担当： 664-1615（直通）

